

GS 連続シンポジウム 2010

まちづくりへのブレークスルー このまちに生きる

第5回 「まちなみを守り、むらなみを育てる — 愛媛 内子」

GS

GROUNDSCAPE DESIGN INSTITUTE

2010年7月23日(金) 16:00-19:00 / 東京大学 工学部1号館2F 土木演習室

入場料:一般/500円 学生/無料

主催 /GSデザイン会議 後援 /土木学会 景観・デザイン委員会

<http://www.groundscape.jp/>

サポート / (株)アトリエ74建築都市計画研究所、(株)アール・アイ・イー、(有)eau、伊藤鉄工(株)、(株)イワタ、(株)内田洋行、(株)オオバ、(有)小野寺康都市設計事務所、(株)オリエントタルコンサルタンツ、(株)建設技術センター、和菓子処 三松堂、(株)住軽日軽エンジニアリング、大成建設(株)、(株)竹中工務店、(株)長大、東京コンサルタンツ(株)、戸田建設(株)、(株)内藤廣建築設計事務所、(株)日建設シビル、日本工営(株)、プロトフォルム、(株)文化財保存計画協会、前田建設工業(株)、三井不動産(株)、三菱地所(株)、ヨシモトポール(株)、(株)ワークヴィジョンズ

GS 連続シンポジウム 2010 まちづくりへのブレイクスルー このまちに生きる

GSデザイン会議では、まちづくりや空間デザインにおける、分野を越えた専門家間のデザイン体制(コラボレーション)の重要性を指摘し、その実践に取り組んできました。本シンポジウムでは、毎回全国各地の実際の事例を取り上げ、関わった方々から直接その思いや経緯などをお話し頂きます。第五回は愛媛・内子の取り組みから、まちづくりとまちなみのあり方を問います。

プログラム 16:00-16:15 開会挨拶 内藤廣(GS代表/東京大学院大学教授)
 16:15-16:45 基調講演 岡田文淑(内子町役場退職)
 16:45-17:15 基調講演 亀田強(企業組合石畳むら代表理事)
 17:30-19:00 パネルディスカッション+会場質問
 進行役:篠原修(GS代表/政策研究大学院大学教授)
 パネリスト:岡田文淑(前出)
 亀田強(前出)
 木下健太郎(宇治市歴史まちづくり推進課)
 中井祐(GS/東京大学院大学教授)
 ※終了後、懇親会(当日会場にてご案内致します)

登壇者略歴

岡田 文淑 元内子町役場

1940年生まれ。1958年内子町役場入庁。教育委員会事務局、産業課、町並み保存対策室、総務課を経て1991年から企画調整課長。2000年3月退職。産業課在任中の1975年からの10年間、観光係として歴史的環境保全運動推進の中で町並み保存を手掛け、地域住民との協働作業による保存対策の確立と、観光による地域振興を所管。その後2期20年にわたる基本構想策定事務を担当。環境保全をベースにした景観行政と山村振興を「村並み保存」運動と称して、住民と共に歩む地域づくりを担当する。退職の後、行政改革をはじめ、引き算型まちづくりと称した住民との協働化をまちづくりコンセプトとして運動を展開。これまで国土交通省地域振興アドバイザー、農水省農村振興アドバイザーとして、全国各地の地域づくりに参画。2004年に日本建築学会文化賞受賞。自治体学会名誉会員。

亀田 強 企業組合石畳むら代表理事

1951年愛媛県内子町石畳生まれ。1969年に内子高校を卒業。直後に北海道へ5年、その後カナダへ2年間酪農の実習に行き視野を広める。現在は酪農ヘルパーとして近隣市町の酪農家への支援に向かう。地元石畳地区では、石畳を思う会会員、自治会むらづくり部長などに就き、石畳地域の「村並み保存運動」の中心的存在として活躍。特に石畳を思う会では、そば班長として「石畳のそば」づくり運動を展開、各種イベントでのそば打ちで活躍する。それら活動を経て2008年10月には、地元有志10名で「企業組合石畳むら」を設立し代表理事に就任、翌年「そば処石畳むら」を開業、現在に至る。そのほか、石畳営農組合長も務め、水田耕作の受託を通して耕作放棄地拡大防止に努める。常に前向きな明るい性格で地域の信頼も厚い。

木下健太郎 宇治市都市整備部参事兼歴史まちづくり推進課長

1959年生まれ。現在京都府八幡市に在住。昭和57年に立命館大学理工学部土木工学科卒。宇治市役所に入所後、道路整備を主に担当し、平成15年から都市計画課にてまちづくりを担当。大久保駅周辺地区のまちづくりなど、市民参画による計画づくりを手がけた。平成21年に歴史まちづくり推進課が新設され、課長に就任。現在宇治川太閤堤跡や文化的景観を活かしたまちづくりに取り組んでいる。

篠原 修 政策研究大学院大学教授

1945年生まれ。1971年東京大学工学系大学院修士課程修了。アーバンインダストリー、東京大学農学部林学科助手、建設省土木研究所、東京大学農学部助教授、東京大学工学部土木工学科助教授、同大学教授を経て、2006年より現職。設計指導に、勝山橋(福井県)、油津堀川運河(宮崎県)、桑名住吉入江(三重県)、津和野川(島根県)、苫田ダム(岡山県)など多数。

中井 祐 東京大学大学院教授

1968年生まれ。東京大学大学院土木工学専攻修了。(株)アブル総合計画事務所、東京工業大学社会理工学研究科助手、東京大学大学院工学系研究科助手、同大学准教授等を経て、2010年より現職。工学博士。設計作品、設計指導に、岸公園(島根県)、宿毛河戸堰(高知県)、北上川分流通施設(宮城県)、松田川河川公園(高知県)、第二西海橋(長崎県)、片山津水生植物公園(石川県)など。

第5回「まちなみを守り、むらなみを育てる — 愛媛 内子」

金山、小布施、竹富島、宇治とまちなみを対象とした連続シンポジウムも今回、愛媛・内子で5回目となる。改めて、これまでの各回を振り返ると、全ての地域において、地域のしがらみや制約制度の中で、孤軍奮闘しながら格闘する人の顔が思い起こされる。本シンポジウムのテーマ「このまちに生きる」ということの意味や輪郭、そして行政、地域住民、専門家の果たした役割、効果がおぼろげながら見えかけている。

内子町役場の職員だった岡田文淑氏がまちづくりを意識し始めたのは昭和47(1972)年頃だという。世は高度経済成長期、かつて和紙や木蠟の生産で繁栄した町も、世の趨勢とは逆に、その産業、人口は右肩下がりになっていく。町の人の暮らしを守らなければ、内子に未来は無い。危機感を持った岡田氏は、地域振興策の手段として、往時の庄屋や重厚な町家が今も軒を連ねる八日市護国地区の町並み保存運動に取り組む。昭和50(1975)年の文化財保護法の改正による、重要伝統的建造物群保存地区という概念の誕生、そして、妻籠、高山、白川郷、京都、萩など全国各地の町並み保存運動に触発され、さらにローマやローテンプルグ、パリなど海外の事例を歩いて回り、長年変わらない本物の持ついきいきとした町並みの空気を体験する。それが、岡田氏の原動力となった。そして、昭和57(1982)年4月、内子町八日市護国は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

伝建地区選定、芝居小屋内子座の保存、町屋のミュージアム化など、20年におよぶ町並み保存運動を経た1990年代、内子町は「町並み保存」から「村並み保存」へ運動を展開していく。場所は内子町で唯一の水源を持つ麓川が形成される石畳地区である。石積みの堰や屋根付き橋、麓川沿いに展開する農村風景、住民の生業や文化を含めた地域の総体を保存していく、という試みである。

近年、文化財保護法や景観法、歴史まちづくり法などの法整備が立て続けに進み、町並み保存のみならず、重要文化的景観のような地域の人々による生活、生業の保護、そして景観の保全と歴史的環境との一体的整備の枠組みまでが制度化された。これは、法律や制度で規制しなければ地域社会の環境が守れない、ということでもある。

八日市護国地区も石畳も、素晴らしい町並みであり、風景である。ただ忘れてはならないのは、町並みや風景を支えてきたのは、そして支えていくのは、あくまで人の意志だということだ。建築物や構造物をものとして残すことを通じて、意志を、精神を引き継いでいくことこそが、まちづくりの本質なのではないだろうか。内子の事例を通じて、まちづくりの意志の継承について考えたい。



写真1: 小田川の河岸段丘に広がるまち



写真2: 町並みと日常



写真3: 芝居小屋内子座



写真4: 石畳の屋根付き橋



参加申込方法/

WEBサイト<http://www.groundscape.jp/sympo/100723/>の応募フォームからお申し込みいただくか、会員(個人・サポート・ユース) / 非会員・氏名(ふりがな)・所属(会社名または学校名)・連絡先(メールアドレスまたは電話番号)・シンポジウム参加申込み人数・懇親会参加申し込み人数をご記入の上、ファックスにてGSデザイン会議事務局まで送ってください。尚、定員になり次第締め切らせていただきます。

問い合わせ先/

GSデザイン会議事務局
 電話:03-5805-5578 / FAX:03-5805-5579
 Web:<http://www.groundscape.jp> E-mail:info@groundscape.jp

会場案内図

